

# アイロニーについて

## —「エコー」は不賛同を表わすか?—

三木 悦三

### 1. 関連性理論とアイロニー

関連性理論によれば、アイロニー (verbal irony) には他者の発言・思考を繰り返す「エコー echoic mention」という行為が観察される。そして、この「エコー」が話し手の不賛同 (disapproval) の態度を表わし、それによって発話の「文字通り」とは反対のいわゆるアイロニカルな意味が聞き手に伝えられる。このようにして、例えば、(1b) のベブ (Bev) の発話「本当にすばらしいピクニック日和だわね」(‘It is a lovely day for a picnic.’) は文字面とは反対の「ピクニックをするにはひどいお天気だ」の意味に解釈されることになる<sup>1)</sup>：

(1) *Ken and Bev are talking in the morning and Ken says:*<sup>2)</sup>

(a) KEN: It’s a lovely day for a picnic.

*They go for a picnic and the weather is dreadful. Bev says:*

(b) BEV: It IS a lovely day for a picnic.

しかし、エコー発話は (1b) のような場合に限られるわけではない。関連性理論によれば (1b) と同じ発話が次の (2b) のようにノン・アイロニカルに用いられた場合もまた「エコー」と見なされる：

(2) *Ken and Bev are talking in the morning and Ken says:*

(a) KEN: It’s a lovely day for a picnic.

*They go for a picnic and the weather is indeed beautiful. Bev says:*

(b) BEV: It IS a lovely day for a picnic.

(2b) では話者 (ベブ) は心から「すばらしいピクニック日和だ」と感じて

いるのであり、このことをケン (Ken) と同じ発言を繰り返すことによって聴者 (ケン) に伝えるのである。しかし、論者たちによれば (2b) のベブの発話は「エコー」であるが、(1b) のように話者の不賛同ではなく、むしろ賛同 (approval)<sup>3)</sup> の態度を表わしていると主張される。読者諸氏よ、はたして論者たちのこのような議論は妥当であろうか。

(1b) (2b) のようにいずれも「エコー」と見なす同一の発話がある場合には不賛同を表わすと主張し、別の場合には賛同を表わすと言うのは議論の首尾一貫性を欠くのではないのか。ありていに言えば、(1b) ではアイロニカルな意味に解釈されるという結論を先取りして、その「文字通り」の意味を反転させる必要があるために「エコー」が不賛同を表わすと主張し、他方、(2b) のようにノン・アイロニカルな発話の場合には意味を反転させる必要はないから、「エコー」を不賛同ではなく賛同と見なすという事実迎合的な議論になっているのではないか。

では、このように論者たち流に賛同も不賛同も表わす「エコー」とは一体いかなる機能をもつものであるのか。私見では、議論の基軸をなす「エコー」という概念の不徹底な理解、加うるに「賛同」「不賛同」という言語行為に関する理解の欠如、が関連性理論によるアイロニー論を皮相な次元に留めていると評さざるを得ない。

## 2. 「エコー」は不賛同を表わすか？

「なぜアイロニーでは意味が反転するのか」——この問いに対して関連性理論の論者たちは「アイロニカルな発話はエコーであり、話者はエコーに託して発話内容に対する不賛同を表わすのだ」<sup>4)</sup> と応じる。しかし、「エコー」によって不賛同の態度が表わされるのであれば、「エコー」一般に不賛同が伴うはずであるが、不賛同が主張されるのはもっぱらアイロニカルな発話についてであり、ノン・アイロニカルな発話の場合には「エコー」であっても不賛同ではなく、賛同を表わすと主張される。ではなぜアイロニカルな発話の場合にのみ「エコー」は不賛同を表わすことになるのか。この肝腎な点が論者たちの議論では不問に付されたままなのである。結局、論者たちとしては当の発話が現にアイロニーとして解釈されるのだから「エコー」は不賛同を表わし、これによって「文字通り」の意味が反転するのだと答えるより外ないと思われるが、これが論点を先取りした議論<sup>5)</sup> (petitio principii) である

ことは読者にも容易に了察されるのではないかと念う。

他者（相手）の発言を繰り返してその「文字通り」とは反対の意味を相手に理解させるといふことには一体どのような意義があるのであろうか。「暗にそれとなく」反対の意味を自覚させるといふところがアイロニーのポイントなのであるか。「察しの悪い奴だ」とひそかに通じ合う者同士が標的（butt）を嗤う共犯（complicity）という点に狙いがあるのか。それともアイロニーを発する側の当意即妙さがポイントであるのか。ともあれ、関連性理論の唱える推論（inferential）モデルにもかかわらず、情報（意味）は話者から聴者へ伝達されるという言語観が論者たちには抜きがたくあるように見受けられる。アイロニーの「文字通り」の意味を反転させる不賛同を「エコー」に仮託するというのはまさしくそのような言語観を示唆するものと言えよう。しかし、意味はこのように伝達（transmit）されるのではなく、むしろ喚起（evoke）されるのではないのか。われわれの見地からは、(1b) のベブの発話は不賛同ではなく、賛同を表明するものにほかならない。

### 3. アイロニーと社会的サンクション

アイロニカルな発話に看取される不賛同なるものは「エコー」という行為それ自体の表わす意味ではなく、「エコー」の対象となる他者の発言<sup>6)</sup>が一般に社会通念ないしは常識から期待されることと乖離（deviate）することによって話者の内面に惹起される違和感に由来している。言い換えれば、アイロニーでは通念的な期待が話者に意識化され、この期待からの（他者の発言の）逸脱<sup>7)</sup>が不賛同という話者の態度表明となって表出されるのである。通常のコミュニケーションでは背景化されている通念的期待がアイロニーの場合には前景化するとも言えよう。「エコー」について関連性理論の論者が不賛同を云々する際にも論者たちは暗黙裡に社会通念を拠りどころとしているのであり、このような基準（norms）に拠ることなくして賛同（「然り」）あるいは不賛同（「否」）<sup>8)</sup>の態度は生じえない。

不賛同（＝違和感）は一般に他者の発話内容<sup>9)</sup>が通念的期待から逸脱するほど当事者には強く意識されるが、アイロニーに特有の、例えば、強意表現あるいは褒めことばの重畳はこの通念的期待との乖離を拡大し、当該発話が‘ridiculous’であることを聴者に察知させる所以となる。と同時に「普通ではない」「変だ」という違和感の看取は必然的に通念的期待を当事者の意識に

前景化する。話者は聴者も共有しているはずの社会通念を誇張あるいは過剰という言語的手段によって意識に顕在化し、聴者が常識的・妥当的な判断を行使するように仕向けるのである。

例えば、(3) のようなアイロニカルな発話では、

(3) Tom is a fine friend.

話者は親友を裏切るというトムの行動がおよそ世人が「友人」に対して期待するところを甚だしく逸脱したものであることを聴者の意識に喚起せしめ、トムをこのような世間的期待にもとる人物として疎外 (alienate) するところに発話のポイントがある。友人を裏切るというトムの行動に対して (3) の話者は意外にも 'a fine friend' と賛同を表明するのであるから、これは聴者の心に激しい違和感 (「トンデモナイ!」) を惹起する。(3) の話者はまさに聴者のこの反応を狙ったのである。しかもそれは通念的期待を共有する世人一般にも喚起されるはずの反応である。かくして話者は共同社会をみずからの側に引き寄せ、トムの行動を世人の期待にもとる行動として圍繞的に指弾するのである<sup>10)</sup>。アイロニーとは社会的なサンクション (制裁)<sup>11)</sup> であり、そのメカニズムは村八分と異なるものではない。このような集団からの疎外が集団の中に身を置く者にとって極めて手厳しい制裁となることは了解され易いところであろう。

以上の見地からは、冒頭 (1b) の発話もまた話者ベブの賛同の態度表明<sup>12)</sup> と見られるべきものとなる。なるほどベブは (1b) を発話するに際して内面的には不賛同 (違和感) を意識しているであろう<sup>13)</sup>。この不賛同は、しかし、「エコ」発話に固有の属性ではなく、ケンの発話 'It's a lovely day for a picnic.' (= (1a)) をベブが常識的通念に照らして「妥当性を欠いた排斥すべき」判断と認識していること示すものにほかならない。ともあれ、明らかに現下の事実と相反するベブの 'It IS a lovely day for a picnic.' という発話によって世人としての分別を具えたケンの心には激しい違和感が惹起される。と同時に、ケンにはベブの発言がかつて自分が行なった発言でもあることが思い合わされる<sup>14)</sup>。かくして、ケンの心に惹起された違和感はいまやかつての自己の発言に向けられ、ケンはそれが妥当性に欠ける発言であったことを自覚せしめられる。しかも、ケンは世人としての分別・常識を欠いた行

動としてこれを自覚するよう仕向けられる<sup>15)</sup>わけであるから、ケンにとってそれはあたかも世間から「爪弾き」にされるかのようにも感じられよう。

関連性理論の論者たちは「エコー」という行為が話者の不賛同 (disapproval) の態度を表わし、この話者の不賛同が聴者に伝達されて、聴者が発話の意味解釈を行なうに際してその文字面の意味を「反転」させる云々と了解するのであるが、不賛同なるものは聴者においても話者の側と同じメカニズム——すなわち、他者（話者）の発言を常識的通念に照らして不当と判断し、これを違和感とともに「否」と排斥すること——によって惹起されるというのが実情なのである。そして、このように聴者に違和感を惹起することを可能にするのは「エコー」発話の話者の不賛同ではなく、賛同を表わすという先述した点である。

#### 4. 「エコー」と「賛同」

では「エコー」とはそもそも何であるのか。一者Aの発言を受けてこれと同じ発言を別の一者Bが繰り返すというのは、ある事態に関してA、B両者が同じ知覚・認知を行なうということであり、BはAもまた共有するはずの言語体系へ同調し、このことを介して、Aが事態を知覚・認知するちょうどそのようにBもまた事態を知覚・認知するのである。当該言語を「知る」者としての立場<sup>16)</sup>に立ってケンが事態を‘It’s a lovely day for a picnic.’と同定 (identify) するように、ベブもまた同じ立場を志向しつつ当の事態を‘It is a lovely day for a picnic.’と同定する、これが「エコー」という行為にほかならない<sup>17)</sup>。「エコー」とは当事者がひとしく言語体系に同調することを通して成立するのであって、このときA、B両者はいずれも当該言語を「知る」者としていわば一体化する<sup>18)</sup>。そしてこれを不可欠の契機としてA、Bのそれぞれの発話が同じ意味を表わすこと、つまり、事態把握を共有していることが相互に理解され、Bが自己の発言を行ないながら同時にそれがAの発言とも見なされるという現象、すなわち、「エコー」が成立するのである。この認識を関連性理論は欠いていると言わなければならない<sup>19)</sup>。

このようにわれわれは一個人以上の、言語体系を「知る」者としての立場に立って、日常実践的にさらに一般化して言えば、世間的な通念や価値観を身につけた「れっき」とした共同社会の成員としての立場に立って、対話という行為に携わるのである。対話の参与者 (participants) がともにこの立場

を实践しつつ発話を行なうことによって、発話の意味理解はもとより、発話を介して「賛同」あるいは「不賛同」の態度表明を行なうということが可能となる。(2b)では、ベブはケンの発言(2a)を受けて当該事態(その日の天候)をケンと同じく‘It’s a lovely day for a picnic.’と同定し、これを「(マサニ)シカリ」と請け合うのである。これが「賛同」(endorsement)という行為である。共同社会のれっきとした成員としての立場に立ってベブが自己の発言——それはケンの発話した内容でもある——を請け合うのであるから、これによって、(2a)に顕示されたケンの判断——これまたれっきとした成員としての判断ではある<sup>20)</sup>——は共同社会的に妥当な判断として他者による裏打ちを与えられる所以となる。「賛同」とはこのように共同社会のれっきとした成員(=世人)の立場を賭けて一者が他者の判断を妥当であると断定(assert)することにほかならない<sup>21)</sup>。

「賛同」がまさしくこの構制をとることによって、(1b)のベブのアイロニカルな発話が聴者たるケンの心に違和感(不賛同)を惹起するということが可能となるのである。しかも、この違和感は世人一般に喚起されるはずのものであり、このことに徴してベブはケンの内部に惹起された違和感が世間的・圍繞的な排斥・拒否の反応となってケン自身に自滅的(self-destructive)に働きかけるよう期することが叶うのである。このような「賛同」あるいは「不賛同」に関する理解もまた、論者たちの議論からは欠落していると断ぜざるを得ない<sup>22)</sup>。

アイロニーとは価値批判であり、アイロニーを発する者は他者(target)の価値判断への同調(=賛同)を敢行するのである<sup>23)</sup>。かくして話者は世間的な価値観<sup>24)</sup>を発話の場に喚起せしめ、これを抛りどころとして他者の価値判断を世間的に「否」「不当」として排斥するのである。アイロニーとは社会的サンクションであるとわれわれが主張する所以である。

価値批判は、しかし、世間的な価値観(=通念的期待)に対する「非同調」という方法によっても行なわれ得る。次節では、話者の積極的な「非同調」による価値批判を瞥見しておく段取りである。

## 5. 「非同調」と価値批判

展覧会に陳列された前衛的な芸術作品をとらえて「まあ、きれいな石ころが置いてあるわねえ」と発話するような場合、話者はその場の状況からして

芸術作品として鑑賞するよう期待されている対象をあえて「石ころ」と見なすのである。芸術作品として意図されている対象を「石ころ」と同定するかぎりにおいて、それは当の対象を芸術作品と見なす価値判断に対する歴然とした「非同調」であり、われわれに笑いを誘引する引き金となりうるとともに、通念的期待に対する公然たる批判的態度の表明となる<sup>25)</sup>。

次のようないわゆる控え目表現 (*understatement*) もわれわれの観点からは通念的な期待に対する話者の非同調、すなわち、同調への拒否と見ることができる：

- (4) You can tell he's upset.
- (5) It seems to be raining.
- (6) Did you remember to water the flowers?

(4) は店員に苦情を申し立てて醜態を演じている顧客に関して行なわれた発話という想定である。なるほど、しかるべき状況で顧客が売り手に対してしかるべく苦情を申し立てるのは世間的に妥当な行動と見なしうるにせよ、(4) の発話者はこの状況を 'he is upset' と同定することによって客の行動が社会通念を逸脱していることを表わそうとするのである。かくして、(4) の発話はこの客の行動を「まとも」な顧客の行動と見なすことへの非同調<sup>26)</sup>、つまり、当該人物に対する話者の（冷やかな）批判的態度の表明となる。

(5) (6) は土砂降りの雨の中で発せられた発話であるが、(5) について Sperber & Wilson (1981: 310) は次のように説く：

Suppose someone had originally made this remark just as the rain was starting. By repeating it in the middle of a downpour, the speaker of (2) [= (5)] shows how laughable it was, in retrospect, to be in any doubt about whether it was really raining. Even when there is no prior utterance, (2) would have a similar effect: By pretending a degree of hesitancy which is completely inappropriate in the circumstances, it conjures up a picture of a quite ludicrous degree of inattention or failure to react.

曰く、(5) は先行する発話の「エコー」としてアイロニカルに作用するのみ

ならず、先行発話が存在しない場合にも同じような効果（‘a similar effect’）をもった発話として機能する。そしてこの後者、つまり控え目表現の場合について Sperber & Wilson は話者の「反応の鈍さ」（‘a degree of hesitancy which is completely inappropriate in the circumstances’）あるいは「無頓着」（‘a quite ludicrous degree of inattention’）を云々するが、このような控え目表現をアイロニーの一種と見なすのみで<sup>27)</sup>、それが通念的期待に対する話者の積極的な非同調の表明であることには自覚が及んでいないように思われる。しかし、(5) をこのように社会通念への話者の非同調の態度表明と解釈することによってはじめて、発話と同時に話者が、例えば、突然の豪雨に右往左往する人々を尻目に超然としてその愚かしさに批判を加える、ということ<sup>28)</sup>が可能となるのである。

他人の発言を「引用」するに際しても、通常の言語的手段に拠らず、知的意味を表わさない音声を（その一部または全部に）充当するのは言語によるコミュニケーションに対する明白な非同調の表明となる。(7) (8) の話者はこの方略を用いることによって、他者（相手）の発言が有意味な言語化に値しない「ナンセンス」であることを含意するのである：

(7) He came out with all the usual stuff about there not being enough money to take on extra staff *blah blah blah*.

(8) HARRY: You know, she gets everything mixed up.

SARAH: You're very wonderful I suppose, yes? You're the clever one!

HARRY: I don't get my facts mixed up, anyway.

SARAH: *Per, per, per, per, per!* Listen to him!<sup>29)</sup> My politician!

(Arnold Wesker, *Chicken Soup with Barley*)

一般に、「模倣」という行為には原物を「再現する」という要素、関連性理論流に言えば、「エコー」が含まれる。しかし、他者の発言を「模倣してからかう」(mimic) という場合には模倣者は、パロディの場合とも同じく<sup>30)</sup>、原物の再現という通念的期待への同調を拒むのであり、まさしくこの非同調によって、模倣者が模倣の対象をナンセンス化する、すなわち、「茶化す」という行為が達成されるのである。例えば、(9) のような場合、



(9) HENNESSEY: It's my last week. I can spend it any way I want. I'd like it to be with my family.

CARNEY: [Mimicking him] *I'd like it to be with my family.*

(Neil Simon, *Biloxi Blues*)<sup>31)</sup>

カーニー (Carney) の発話は書記的には先行するヘネシー (Hennessey) の発話の「エコー」と見なしうるにせよ、すでに音声的な歪曲 (distortion) が加えられているのであって、ヘネシーの発話の正当 (bona fide) な再現たりえていない。話者カーニーの意図的な非同調 = 不賛同によるヘネシーの発言 'I'd like it to be with my family.' の「矮小化」「卑小化」が行なわれているのである。

以上のように、本節で取り上げたいずれの場合にも話者の積極的な非同調の態度表明を認めることができよう。この点でこれらは——関連性理論では十分に認識されていないように思われるが——「エコー」、すなわち話者の同調が見い出されるアイロニーの場合とは一線を画するべきもの<sup>32)</sup>と言わなければならない。

## 6. むすびに代えて

以上、論じたところから、関連性理論が話者の不賛同の態度表明と見なすアイロニカルな「エコー」発話は、真実においては、賛同の表明であることが判明したのではないかと思われる。論者たちの言うようにアイロニカルな発話が不賛同を表わすとすれば、'I agree.' という文字通りには賛同を表わす発話がアイロニーとして作用する場合には不賛同を表わすことになる。この意味の反転を「エコー」が引き起こすと関連性理論は説明するのであるが、しかし、論者たちも認めるように「エコー」がつねに意味を反転させるわけではないから、聴者としては、結局、発話内容と事態 (the way things actually are) との不整合 (inconsistency) からアイロニカルな意味を読み取らざるを得ない。その場合に、話者が「エコー」発話によって他者 (target) の判断に同調し、これに「賛同」を表明するゆえにこそ、聴者は発話の文字通りの意味と当の発話が指示する事態との不整合に違和感 (「否」「トンデモナイ」) を惹起され、この違和感が聴者自身の不賛同の態度となって相手 (話者) の発話の「文字通り」の意味を反転させる所以となるのである。

「嘘をつく」という行為が成り立つためには、それが意図的に行なわれるにせよ、その意図はなかったのに結果的に「嘘をついた」ことになるにせよ、いずれの場合にも話者が発話内容の真実性を少なくとも表向きは請け合う（＝「断定」する）ということが不可欠であるように、「I agree.」という発話を、話者がアイロニーにおける場合のように違和感を以ってことばとは裏腹の「不賛同」の態度（*dissociative attitude*）で行なおうと、あるいはそのような違和感を伴わずに行なおうとも、話者が「I agree.」と発すると同時に「賛同」という行為が遂行される<sup>33)</sup>のである。

これを要するに、聴者に「不賛同」を惹起するのはあくまでも相手（話者）の発話内容と通念的期待との不整合であり、関連性理論のいわゆる「エコー」ではないということである。「エコー」という行為は、むしろ、かくて惹起された聴者の不賛同が差し向けられるべき標的（*victim*）をいわば直示的に指し示す働きをもつと言えよう<sup>34)</sup>。

‘Tell me about it.’という発話が相手の発言に対する「賛同」を表わす場合とともに、状況によってはアイロニカルに作用する<sup>35)</sup>場合があるように、アイロニーの分析の核心を成すのは「賛同」と解釈される発話がどのようなダイナミズムによって反語的に働くものとなるのか、この「意味の反転」のメカニズムを究明する点に在る。関連性理論のようにアイロニーを「エコー」と見なし、「エコー」は賛同と不賛同を表わす場合に区分されるが関連性の原則（*the principle of relevance*）に従って解釈するとアイロニーは「エコー」が不賛同を表わすケースに該当する云々と、本来、説明されるべき筈の論点、すなわち、「エコー」がなぜ不賛同を表わすか、を「エコー」の区分とともに（自明のこととして）不問に付してしまう議論ではアイロニーのもつ動的なメカニズムを明らかにしたことはないのである。

アイロニーを発する者は世間的・常識的な通念を拠りどころとして「文字通り」とは反対の意味を所期することが叶うのであって、この常識的通念を相互の意識に喚起し、相手（*target*）の判断を世間一般の常識に「もとの」として集団的・圍繞的に排斥・拒否する、これがアイロニー（*verbal irony*）と呼ばれる言語現象にほかならない<sup>36)</sup>。

\* 草稿の段階では、内田聖二、菅山謙正、西山佑司の各氏から（さまざまな程度に）激励のことばとともに懇切な批判を頂戴した。特に菅山氏からは重ねての評言を忝の

うした。また、熊本言語学研究会例会（平成 27 年 6 月）での口頭発表に際しては市川雅巳、登田龍彦、松瀬憲司の各氏からも有益な批評を賜った。最終段階では、読みづらい小論にも拘わらず、査読者（覆面）の割切な批判を得て、貴重な再考の機会に恵まれた。ここに誌して感謝の微意を表したい。

## 注

- 1) 関連性理論では、アイロニーのみならず控え目表現等も含めて「エコー」による統一的な説明を志向するので、アイロニーは「文字通り」の意味の「反対」を表わす (communicate the contrary or contradictory of the literal meaning) という立場は採らない。しかし、本稿では第 5 節で論じるように控え目表現はアイロニーとはメカニズムを異にするという見地に立って、アイロニーの意味を文字面とは「反対の意味」と総称する。「意味の反転」についても同じ。なお、「不賛同」には ‘disapproval’ とともに ‘dissociation’、‘rejection’ の語も当てられる。
- 2) 用例は Clark (2013 : 282) より拝借。
- 3) もしくは ‘acceptance / endorsement’。
- 4) 例えば、‘Verbal irony, we argue, invariably involves the expression of an attitude of disapproval... The speaker echoes a thought she attributes to someone else, while dissociating herself from it with anything from mild ridicule to savage scorn.’ [Wilson & Sperber (1992: 60)] あるいは、‘... she (i.e. the speaker) is mentioning or *echoing* a thought she attributes to someone else (or to herself in the past) in order to express a certain type of dissociative attitude to it.’ [Wilson (2006: 1728)]
- 5) 「(エコーには賛同と不賛同の場合があるが) アイロニーではエコーは不賛同を表わす」「なぜアイロニーではエコーが不賛同を表わすのか」「アイロニーが現に不賛同を表わしているからである」という議論。Grice 流のアプローチに向ける論者たちの批判は皮肉なことに (no pun intended) そのまま彼ら自身にも当て嵌まる: ‘The standard approach to irony, which claims that the main point of an ironical utterance is to convey the opposite of what is said, would thus make every ironical utterance uninformative, both on the level of what is said and on the level of what is implicated. The speaker would be intending to communicate a certain belief, but, in the absence of any special intonation, *his intention would only be recognized by someone who already knew that he held that belief.*’ [italics mine] [Sperber & Wilson (1981: 301)]
- 6) 後述する (3) のように、アイロニーの対象には他者の発言のみならず行動も含まれる。話者は (3) の発話によってトム (Tom) の奉じるとおぼしき価値観に同調 (= 賛同) し、「立派な友人」としてのトムの行動に是認を表明するのである。
- 7) 「通念からの逸脱」とは発話の状況において一般に期待される事態把握の仕方とは (著しく) 異なる事態把握がアイロニカルな発話によって提示されることを謂う。また「社会通念ないしは常識」とはある事態を理解・把握するに際してフレーム (準拠枠) を成すところのもの。「通念的 (世間的) 期待」「常識的通念」と言うのもこれに

同じ。

8) いわゆる「否定 negation」はこのような対他者的な不賛同＝違和感を成立の契機としている。Cf. 三木 (2004), Miki (2012).

9) 査読者から「発話内容」の定義が不明であるとの指摘を受けたが、アイロニーを論じる本稿では「発話内容」とは発話の表わす「文字通り」の意味、関連性理論に言う「表出命題」(the proposition expressed)の謂い。Cf. 今井 (2015: 36).

10) 本稿ではアイロニーが最も「攻撃的」に作用する事例を取り上げているが、もちろん、軽やかな戯れとも言うべきアイロニーも行なわれるであろう。日常的にはむしろこのようなケースの方が普通かも知れない。が、その場合にもアイロニーが差し向けられる標的 (butt) の「分別」「わきまえ」の欠如を(軽やかにではあれ) 嗤うという点は認められよう。冷たい雨まじりの風が吹き荒れる春のイギリスで発せられた‘Oh, to be in England / Now that April’s there!’ (ああ故国にしあたましかば/ 時しも4月ならん) という発話は、ウィルソン&ウォートン (2009: 198) の指摘するように、「ロマンティックな望郷の念が常に現実と一致するとは限らない」「気候はなかなか期待通りにはならない」等の含意を表わしうるが、いずれの場合にも話者は母国の春に対する期待を違和感(「トンデモナイ」とともに排斥・拒否するのであって、みずからの抱いた期待の「甘さ」に自戒・自嘲が込められる。なお、査読者からは‘It’s a lovely day for a picnic.’の発話が「まったくいい天気になってくれましたね」のように天候に向けられたアイロニーとして働く場合もあるのではないかと指摘を受けた。なるほどそのようなケースも考えられよう。しかし、その場合には天候が擬人化されることになるのではないかと思われる。「戯れ」のごときアイロニーについては、三木 (2016) も参照。

11) したがって、アイロニーは集団の価値観にもとる「異分子」を疎外し、集団を同質化・同型化する働きをもつ。

12) すなわち、‘It is a lovely day for a picnic.’というケン的事態把握に対するペプの賛同の態度表明。

13) この意味において‘pretense」という面が確かにアイロニーには認められる。しかし話者の「演技」「ふり」という点にアイロニーのポイントがあるわけではない。Clark & Gerrig (2007) の‘pretense」理論ではこの「演技」が‘common ground」によって看破されると同時にアイロニーが成立するという説明になるが、アイロニーの核心は話者・聴者に喚起される違和感によって標的が集団的・圍繞的に排斥・疎外される点にある。

14) アイロニー・マーカ (irony marker) としてペプの発言の‘is」に置かれた強勢は話者の「賛同」の態度を明示し、これによって相手(ケン)の注意を先行する発話(1a)に向けさせるとともに通念的期待を前景化する。

15) ケンに内在化している世人としての常識が自己を映し出す「反射鏡」として作用するとも言い得よう。

16) 「当該言語を知る者」とはいわゆる「理想的な話し手一聴き手」(the ideal speaker-

hearer) に相当する。

17) 「エコー」は相手の発言内容 (= 「意味」) の確認として機能する場合が一般的であろう。相手の発したことば (音声) の確認という場合も、指示対象の確認、さらには相手の発言から得た推論内容の確認という場合もあり得ようが、いずれにしても発話者は「エコー」によって相手の事態同定に対して同調 (= 一体化) を試みるのである。関連性理論の論者たちは、例えば、*Peter: Ah, the old songs are still the best. Mary (contemptuously): Still the best!* [Wilson & Sperber (1992: 59)] のメアリーの発言に見られるような、Quirk *et al.* (1985: 837-838) の言うエコー感嘆文 (echo exclamation) を論拠として「エコー」が不賛同を表わす旨を主張しているように見受けられるが、この場合のメアリーの ‘Still the best!’ 「えーっ、やっぱり最高だっけ? (まあ、あきれた!)」もピーターの事態同定への同調であり、意味 (= 発言内容) の確認にほかならない。この確認の発話にパラ言語として話者の心情 (「侮蔑」) が随伴するのであって、このような「直截」的な感情の表出は本論 (1) や (3) の修辞的技巧としてのアイロニーとは別異である。他方、しかし、メアリーの ‘Still the best!’ を「ええ本当に、やっぱり最高よね」のようにアイロニーとして発話あるいは解釈することも可能であるが、Wilson & Sperber がこの曖昧さを自覚しているようには見えない: ‘If irony is merely a variety of echoic utterances, then it should arise as naturally and spontaneously as echoic utterances in general, and require no separate rhetorical conventions or training.’ [Wilson & Sperber (1992: 61-62)] いずれにしても、メアリーの発話がアイロニーとして解釈される場合にはそれは「不賛同」ではなく、やはり「賛同」を表わすものとなる。アイロニーについては三木 (1996) ないしは三木 (2009a) [特に pp. 33-36.] 等も参照。また、修辞疑問文については三木 (2009b) を参看。関連して、対話における同調 (alignment) を広汎に論じた Garrod & Pickering (2007) も参照。

18) 現実においては、このような「一体化」は negotiation (折衝) の所産にほかならない。いわゆるメタ言語的否定 (metalinguistic negation) ではこの「一体化」が対話的に争われる。A の事態把握に異 (= 非同調) を唱えて B が別の事態把握を主張するのである。「神々の争い」とも呼ぶべきこの状況は、同一の事態が問題となっているという当事者の了解とともに、もっぱら表現の「適切性」ないしはことばの「選択」に関する争いと見なされる傾向が生じる。否定文には一般に先行発話が想定される以上、否定文に含まれる相手のことばの繰り返しは「エコー」であって、「エコー echoic」は「記述的 descriptive」に対立する概念であるから「記述的」= 「非エコー的 non-echoic」であり、そして論理の一貫性から「エコー的」= 「非記述的 non-descriptive」と見なされて、Carston (1996) では錯綜したメタ言語的否定論が展開される。これに対する批判は三木 (2004)、Miki (2012) を参照。ちなみに、次のような例では話者 (フィリックス) は自らの事態認識に同調するよう他者 (オスカー) を促し、当の事態認識を「事実」(fact) として成立せしめようとするのである: OSCAR: (*The phone rings. Oscar picks it up quickly*) Hello? Oh, hello, Frances! FELIX: (*Stops clearing and starts to wave his arms wildly. He whispers screamingly*) I'm not here! I'm

not here! You didn't see me. You don't know where I am. I didn't call. I'm not here. I'm not here. OSCAR: (*Into the phone*) Yes, he's here. [用例は山口 (2009: 58) より] いわゆる「事実」が当事者の、さらに広くは世人一般の、ひとしい事態認識に掛かっていることを示す例であるが、この場合、オスカーはフィリックスの事態認識への同調を拒否して 'Yes, he's here.' と発言している。Cf. 'Bang, you're dead!'/ 'Okay, Lina—you don't like him! You hate him! You're resisting him! Keep that mood music going!' [B. Comden & A. Green, *Singin' in the Rain*] (映画監督の発言)

19) このことは論者たちが 'The notion of echo we used in analysing irony is a technical one; it is deliberately broad, and goes beyond what would generally be understood by the ordinary-language word 'echo'.' [Sperber & Wilson (1998: 284)] と主張するにも拘わらず当て嵌まる。

20) 「賛同」を表わす (2b) の場合に対話の当事者に前景化する世間的通念が (2a) では前景化しないという違いはある。

21) 遂行文の示す「遂行性」のメカニズムについては三木 (2015) を参照。

22) Seto (1998: 242) は A: Bob has just borrowed your car. B: *Well, I like that!* の B のような発話を「エコー」を伴わないアイロニーの例と見なしているが、われわれの見地からはこれは A の発話に示されたボブの行動・判断に対する B の「賛同」の表明ということになる。関連して、Wilson & Sperber (2012) は、ひどい仕打ちをした相手に話者 (Sue) が発した 'I can't thank you enough.' について '... ironically echoing a specific hope or wish of Sue's that the addressee's behaviour would be worthy of gratitude, or a particular application (to the addressee's behaviour) of a widely shared normative representation of how people ought to behave.' (p. 132) と述べる。しかしこの場合、スーの発話 'I can't thank you enough.' によって「エコー」されるのは、論者たち流の議論からすれば、「感謝するにふさわしい行動を相手が取らうだろうというスーの希望や期待もしくは人々一般に期待される行動作法」ではなく、相手の行動、もう少し具体的に言えば、その行動に具現されている (価値) 判断でなくてはなるまい。これをスーが「エコー」して当の相手に帰属 (attribute) させ、不賛同 (disapproval) の態度を表明しつつ「どうも有り難う」と発することによって、スーの感謝の表明が本心からではないことがアイロニカルに相手に伝えられるというのが関連性理論の説明のはずだからである。しかし他方また、Wilson & Sperber の主張するように、スーが相手への期待あるいは人々一般に期待される行動作法を「エコー」する、言い換えれば、それらの期待や行動作法に同調することも可能である。が、その場合のスーの発言は相手の行動に対する非同調の態度表明となる。このような区別が論者たちの議論で看過されてしまうのは基軸を成す「エコー」の定義が十全ではないからである。さらに本論第 5 節の議論を参照。

23) 関連性理論に言う「エコー」とは、本稿の見地からは、他者の抱懐する (とおぼしき) 価値判断への同調にほかならない。したがって、それは他者の発言のみならず行動・挙措一般を対象とする。注 6) も参照。

24) 「世間的な価値観」は固定したものではなく、個人あるいは個人の所属する集団によって異同があり得る ‘negotiable’ な代物である。しかし、ともあれ共有の価値観が聴者との間に適切に成立しない場合にはアイロニーは不発 (misfire) に終わる。また、「共有の価値観」が小集団内に限定される場合もあり得よう。

25) 筋骨隆々たる人が「僕は（こう見えても）蒲柳の質で神経がとてもデリケートなんです」と発するような場合、その発言は世間的期待からの逸脱によって笑いを引き起こすものとなりうるが、穏やかにではあれ、世間のステレオタイプ的な見方 (categorization) に異議を申し立てるといふ側面は認められよう。また、(1) のような悪天候下で ‘It’s a lovely day.’ あるいは ‘There is really no such thing as bad weather, only different kinds of good weather.’ 等々と発話するのはとかく天気にも愚痴をこぼしがちな世人の習性に対する非同調の表明となる。注 10) の R. ブラウニングの一節はこの意味にも、Grice (1975) の哲学教授の推薦文は、通例、この意味に解しうる。

26) (4) の例について Wilson & Sperber (1992: 61) は ‘...as is shown by the ironical understatement in (1) [= (4)], a speaker may dissociate herself from an opinion echoed not because it is false but because it is too mild—because only someone dull-witted and imperceptive could put it forward in the circumstances.’ [italics mine] と論じるが、(4) が控え目表現として機能するのは Wilson & Sperber の言うように話者が自己の発言内容に対して非同調 (dissociation) を示すからではなく、顧客の行動を公序良俗に合った行動と見るような通念的期待に対して非同調を表明するからである。

27) Wilson & Sperber (1992) は (4) について ‘intuitively ironical’ (p. 54) と述べるに留まっている。ちなみに、Wilson (2012: 345) はピザを丸ごとたいたらげた人物に対して発せられた ‘How about another small slice of pizza?’ の発話について ‘ironically echoing the sort of utterance a good host is expected to produce, or that a guest who thinks his greed has not been noticed might be expecting to hear’ 云々と説くが、これは控え目表現であり、わかまえない相手の行動を眼前にして話者は自らは作法に合った発言を行ないつつ、この人物の行動に非同調を表明するのである。(この場合に、例えば、ピザ 1 枚全部を ‘a small slice of pizza’ と見なすような判断を相手に帰属させて、この判断に同調しつつ話者が ‘How about another small piece of pizza?’ と発する場合には、その発話はアイロニカルに解釈されよう。) また、年甲斐もない相手の行動に対して ‘How old did you say you were?’ と発するような場合も当該人物を年齢相応に処遇することに疑念が呈されるのであり、話者の発言はそうした対人的処遇に対する非同調の表明となる。このような例から判断するかぎり、控え目表現に関する関連性理論の説明は皮相と断言せざるを得ない。Cf. 注 22).

28) あるいは、「この程度の雨などたいしたことはない」のように現下の雨を「土砂降り」と見るような世人一般の通念に対する傲然たる批判ともなり得よう。なお、控え目表現としての (6) も (5) と同じ含意を持ち得る。

29) このような 3 人称代名詞の機能については三木 (2001) を参照。

30) Cf. ‘To bash or not to bash: that is the question. Whether ’tis nobler to suffer the slings

and arrows of outrageous trade practices. Or to take arms against protectionist barriers. To punish, to avenge. Perchance to trigger a trade war. Ay, there's the rub that must give us pause.' [Time, June 5, 1989]

31) 用例は山口 (2009: 62-63) より拝借。

32) パロディの声の調子 (tone of voice) とアイロニーのそれとの違いには論者たちも気付いてはいる: 'Suppose that Bill keeps saying, 'Sally is such a nice person', whereas Judy totally disagrees. Judy might express a derogatory attitude to Bill's judgement of Sally in two superficially similar, but quite perceptibly different, ways. She might imitate Bill and repeat, 'Sally is such a nice person!' with an exaggerated tone of enthusiasm. Or she might utter the same sentence, but with a tone of contempt, so that there is a contradiction between the literal content of what she says and the tone in which she says it.' [Wilson (2012: 144)]

33) もちろん話者の態度や話し方によっては 'I agree.' という発話が「賛同」という行為の遂行と見なされない場合はあり得よう。しかし、その場合にもそれは「賛同」の不成立なのであって、「不賛同」という行為の不成立ではない。

34) 「エコー」によって他者の発言に喚起的 (evocative) に言及するというのは、話者が聴者との間に共有されている知識を「あれ」あるいは 'that' によって指示する代名詞の「直示的」(deictic) 用法に類比することができよう。Cf. Miki (1996).

35) "You'd better go to bed early tonight, because you are going to take the first train tomorrow." "Come on. *Tell me about it!*" [内田 (編) (2009: 549)]. なお、三木 (2016) も参照。

36) 本稿で論じたアイロニーを含めて、論者たちはいわゆるメタ表示的用法 (metarepresentational use) について、'I will argue that all varieties of metarepresentation, public, mental and abstract, can be analysed in terms of a notion of *representation by resemblance*, opening the way to a unified account.' [Wilson (2012: 243)] と論じる。しかし、「統一的説明」('a unified account') なるものが個々の言語現象の特質を明らかにしない、十把一からげの的なものであってはならないことは言うまでもあるまい。

## References

- Carston, Robyn (1996) 'Metalinguistic negation and echoic use.' *Journal of Pragmatics* 25, 309-330.
- Carston, Robyn and Seiji Uchida (eds.) (1998) *Relevance Theory: Applications and Implications*. John Benjamins.
- Clark, Billy (2013) *Relevance Theory*. Cambridge University Press.
- Clark, Herbert H. and Richard J. Gerrig (2007) 'On the pretense theory of irony.' R.W. Gibbs, Jr. & H. L. Colston (eds.), *Irony in Language and Thought*, 25-33. Lawrence Erlbaum.
- Garrod, Simon and Martin L. Pickering (2007) 'Alignment in dialogue.' M. Gareth Gaskell (ed.), *The Oxford Handbook of Psycholinguistics*, 443-451. Oxford University Press.



- Grice, H. P. (1975) 'Logic and conversation.' P. Cole & J. L. Morgan (eds.), *Syntax and Semantics*. Vol. 3, 41-58. Academic Press.
- 今井邦彦 (2001) 『語用論への招待』大修館書店.
- 今井邦彦 (2015) 『言語理論としての語用論—入門から総論まで』開拓社.
- 三木悦三 (1995) 「アイロニー試論—社会的制裁としてのアイロニー」熊本県立大学文学部紀要第1巻、119-140.
- Miki, Etsuzo (1996) 'Evocation and tautologies.' *Journal of Pragmatics* 25, 635-648.
- 三木悦三 (1996) 「アイロニー論のために」奈良女子大学文学部英語・英米文学科 (編)、『尾崎寄春・大沼雅彦両教授退官記念論文集』、137-149. あぼろん社.
- 三木悦三 (2001) 「'Look at you!' —語法研究からレトリックへ」英語青年 CXLVII, 374-375.
- 三木悦三 (2004) 「メタ言語的否定と「エコー」」熊本県立大学文学部紀要第10巻第2号、39-66.
- 三木悦三 (2009a) 「命令文の語用論—関連性理論に寄せて—」熊本県立大学文学部紀要第15巻、15-41.
- 三木悦三 (2009b) 「疑問文の語用論」西川盛雄教授退官記念論文・随想集刊行会 (編)、『言語理論の展開と応用』、36-50. 英宝社.
- Miki, Etsuzo (2012) 'Carston on metalinguistic negation.' A. Yoshimura, A. Suga & N. Yamamoto (eds.), *Observing Linguistic Phenomena: A Festschrift for Professor Seiji Uchida on the Occasion of His Retirement from Nara Women's University*, 179-190. Eihosha.
- 三木悦三 (2015) 「英語の単純現在—遂行文と状態動詞を中心に—」熊本県立大学文学部紀要第21巻、55-86.
- 三木悦三 (2016) 「'Look at you!' / 'Trust you!' と let 命令文」熊本県立大学文学部紀要第22巻.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Seto, Ken-ichi (1998) 'On non-echoic irony.' Carston & Uchida (eds.), 239-255.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1981) 'Irony and the use-mention distinction.' P. Cole (ed.), *Radical Pragmatics*, 295-318. Academic Press.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1986/1995<sup>2</sup>) *Relevance: Communication and Cognition*. Harvard University Press/ Wiley-Blackwell.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1998) 'Irony and relevance: A reply to Seto, Hamamoto and Yamanashi.' Carston & Uchida (eds.), 283-293.
- 内田聖二 (編) (2009) 『英語談話表現辞典』(*A Dictionary of Colloquial Expressions with Detailed Pragmatic Annotations.*) 三省堂.
- Wilson, Deirdre (2006) 'The pragmatics of verbal irony: Echo or pretense?' *Lingua* 116, 1722-1743.

Wilson, Deirdre and Dan Sperber (1988) 'Representation and relevance.' R. Kempson (ed.), *Mental Representation: The Interface between Language and Reality*, 133-153. Cambridge University Press.

Wilson, Deirdre and Dan Sperber (1992) 'On verbal irony.' *Lingua* 87, 53-76.

Wilson, Deirdre and Dan Sperber (2012) *Meaning and Relevance*. Cambridge University Press.

ウィルソン、デアドリ / ティム・ウォートン (2009) 『最新語用論入門 12 章』 [今井邦彦 (編)、井門亮 / 岡田聡宏 / 松崎由貴 / 古牧久典 / 新井恭子 (訳)] 大修館書店 .

山口治彦 (2009) 『明晰な引用、しなやかな引用：話法の日英対照研究』 くろしお出版 .